

アジアサマースクール in Bangkok 2025

工学部 建築学科 1年 小山内悠人
応用生物学部 食品栄養科学科 1年 宮口真緒
工学部 都市建設工学科 2年 岡田尚士
工学部 建築学科 2年 西村香乃
応用生物学部 食品栄養科学科 2年 星野結菜
人文学部 心理学科 3年 加藤舞
人文学部 英語英米文化学科 3年 日野絆菜
生命健康科学部 生命医科学科 4年 風間優花

— 計8名 —

目次

- タイの文化	p3
- 授業風景	p6
- 毎日の食事	p8
- Kubota Farm でのフィールドワーク	p11
- Ayutthaya でのフィールドワーク	p14
- EGAT でのフィールドワーク	p17
- メンバー交流 / 修了式	p19
- プログラムの良いところ / 難しいところ	p20

タイの文化

人文学部 英語英米文化学科 3年 日野絆菜

1. チャオサーンプラヤー国立博物館

土曜日のアユタヤトリップの最初の目的地だった。ここはアユタヤ王朝時代の貴重な遺物、日用品、美術品などが展示されていた。王族用の金で作られた指輪やネックレス、王の象徴や権威を表す剣などがあり、王朝時代の栄華や豪華さを感じることができた。今よりも金が貴重な時代だったのにも関わらず膨大な量が使用されていたことから文明の発展具合が分かった。学校ではタイの歴史や古代の文化を学ぶことが少ないので非常に貴重な体験だった。



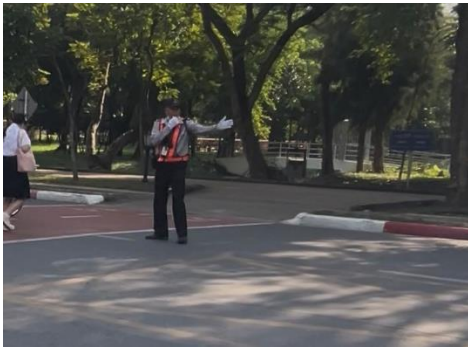
2. 街の様子

日本との大きな違いは活気と交通量の違いである。街を歩いている時、車やバイクの走行音やクラクションが良く聞こえてくる。屋台が開かれているところに行けば呼び込む声や話し声が聞こえてきて活気に満ちていた。私たちがいたのは都市部なので田舎の方は静かで落ち着いているかもしれないが、都市部は日本の東京や名古屋とはまた違う騒がしさがあった。帰国した時に思わず日本って静かだなと思うほどでタイのあの騒々しさが恋しくなった。

また、タイは日本に比べて圧倒的に交通量が多かった。渋滞が予想されるので予定より早く出発したり、目的地を変更することがあった。3人で原付に乗っている人達やヘルメットなしでの運転など日本なら指導される乗り方をしている人がいて新鮮な光景だった。また、車の合間を縫って走ったり、逆走してくるバイクがいて交通法がもはやなかった。日本で言われる「車に気を付けて」とタイで言われるとでは危機感が大いに違った。道路によっては信号がないところがあり、警備員のような人が笛を使って道路整備をしていた。その笛も街中に響いていた。

以下の写真のようにバイクや自転車の2人乗りはもはや当たり前の光景だった。さらに街中に置いてあるバイクなどを見てみると後ろに人が座れるようなシートがあったので、

より日常に強く根付いていると感じた。



3. トイレ



タイではトイレによってはペーパーを水で流せるところもあれば、隣にあったゴミ箱に捨てる場所があった。しかし一貫していたのは、トイレの横に写真のようなシャワーが備え付けられていたことだ。日本で言うウォッシュレットのようなものである。

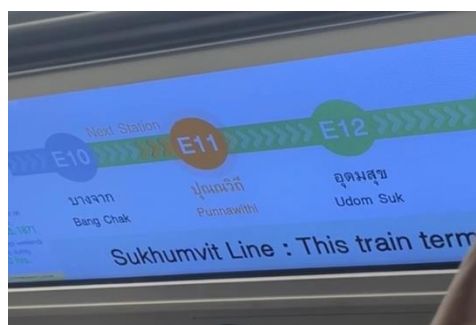
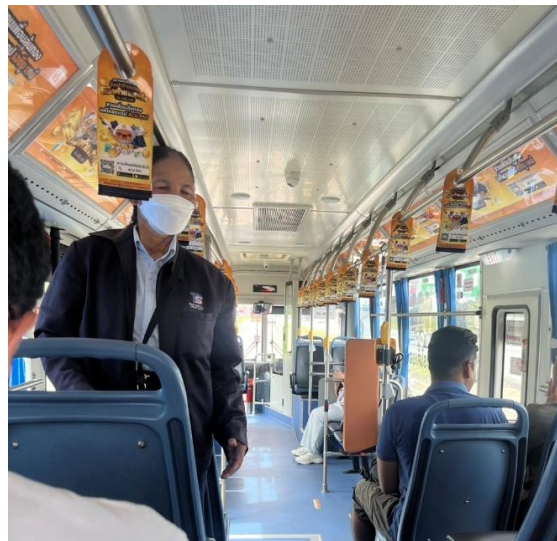
一方でペーパーが備え付けられていないトイレもあった。しかしこれは世界的に珍しいことではなく、むしろ日本の常備されていることの方が稀である。これらの経験から日本のトイレの設備の高さを改めて実感し、加えてこのような違いから生活習慣の差を強く実感した。

4. 公共交通機関

私は Free Day に電車とバスを使ってバンコク中心地に向かった。それぞれの特徴や日本との違いを記していく。

バスの車内は日本と変わらなかったが、運賃の払い方が違った。車内にいる係員さんが一人ひとり行き先を聞き、お金をもらって領収書を渡すという仕組みだった。混雑時は人をかき分け、車体の揺れに耐えながらも対応していく姿が見られた。

バンコクの電車には高架鉄道と地下鉄の2種類があり、私は高架鉄道の「B T S (スカイトレイン)」を利用した。車内は日本と大分同じだったが、座席配置に若干の違いがあった。左側には座席がある一方、右側には座席が設置されていなかった。この程度の違いしか見られなかった。切符は写真のようなカードでイラストの種類がいくつかあった。



授業風景

工学部 建築学科 1 年 小山内悠人

概要

授業内容としては、GIS や AI に関連した先進的な技術の詳細とその活用事例などであった。

授業のある日は、始業時間までに続々と生徒が集まり、隣室で談笑したり、飲み物を用意したりしていた。

授業中は質問をしたり、各自メモを取ったり、各々にあった方法で学習していた。

休憩時間では教授に個別で質問、雑談をするなどかなり親しみやすい雰囲気があった。

学習内容については、必ずしも自分の専攻と関係するものではなかったため、関連性を意識しながら学ぶ必要があった。

これに関しては教授陣も想定外だったようで、多少は仕方がないと感じた。

また、授業難易度や個々の理解度にも差がみられた。

一方では、問いかけやグループワークなどで主体的に参加することができる授業も多かった。

改善点

エアコンが寒いので上に羽織るものを持って行ったほうがいいと思った。

授業やスライドに専門的な難しい英単語が出てくると自分で調べたり、解説をお願いしたりする必要があった。

授業時間にも差があり、早く終わることもあったが、すこし延長することもあった。

良くも悪くも時間にあまり厳しくなかった。

諸感想

授業中でも少しふざけあったり、“これよくわかんないね”などとコミュニケーションをとったりすることも少なくなく、勉強内容だけではない思い出になった。

まとめ

授業が単にインプットだけのものではなく、発表やグループワークなど、総合的にいろいろな技能を身に着けるような内容になっていたのも、印象付けながら学習を進めることができた。

アジアサマースクール in Bangkok 2025



毎日の食事

生命健康科学部 生命医科学科 4 年 風間優花

タイでの毎日の食事について記します。

このプログラムでは基本毎日の食事が用意されており、朝は 8 時から 9 時過ぎ頃に決まったカフェテリアで朝食を食べました。朝食にはインディカ米にお肉と野菜を添えた料理や、それにコンソメ風スープをかけたワンプレート料理が中心で、とてもヘルシーでした。時々お味噌汁に似たスープが添えられていました。



そして食後にはいつもデザートがあり、タイならではの果物やスイーツを沢山用意していただきました。果物はランブータンやリュウガン、パンダンリーフとココナッツのゼリーなどを食べました。初めて触れて食べるものも多く、果物はどの様に外側の皮を剥いて食べるのか質問しながら挑戦し、とても新鮮でした。



お昼ご飯は 12 時から 13 時頃に用意されていて、大学内の食堂で食べていました。各テーブルには卵焼きやピラティア魚、春雨と野菜炒め、トムヤムスープ、煮卵とチキンのスープなど、毎日 6 品ほど種類があり、そこから好きなだけ食べたいものをお皿に盛り付けて食べる形式でした。辛い料理も辛くない料理もあったので、辛いのが得意な人も得意でない

人も楽しく食べることが出来ました。沢山量があって、お腹いっぱい食べて力を付けることが出来ました。



そして授業日にはいつもブレイクタイムがありました。この時間には、用意された沢山の種類のケーキやパンを食べることが出来ました。ケーキ類ではほぼ全てにココナッツが入っていて、タイを感じました。ココナッツが苦手な人も居るようでしたが、良い挑戦でした。パン類は、アップルパイやプリンタルトなどを食べました。甘くてとても美味しかったです。



夕食は18時頃に集合して食べました。大学内のBarで食べるだけでなく、大学の外へ出ることも多かったです。大学内でのBarでは全員が囲める長机の上に野菜やスープ、魚などが用意されていて、好きなだけ各自お皿に盛り付けて食べられる形式でした。ショッピングセンター内の一番軒(ラーメン)へ行くこともあり日本食の味を感じることも出来ました。また屋台街のような場所へ行くこともあり、その中に建つタイ料理屋さんで食べることもありました。メニューから気になる食べ物を自由に選ぶことも出来てとても良かったです。食事のあとは少しだけ散策をして、他の屋台で飲み物を買うことも出来ました。



このような食事以外にも、ウェルカムパーティやフェアウェルパーティの回ではピザやチキン、ポテト、ガーリックフランスパンなど沢山のジャンクフードが用意されていたこともありました。

どの食事でも毎回同じものが出ることは少なく、毎日たくさんの種類の食事が用意され、とても美味しく食べることが出来ました。さらにベジタリアン向けの食事でも種類が多く、そして美味しく驚きました。全員が楽しく美味しく食事が出来たと思います。

Kubota Farm でのフィールドワーク

応用生物学部 食品栄養科学科 2年 星野結菜

タイにおける日系企業の見学の一環として、世界有数の農業機械メーカーであるクボタが設立したクボタファームを訪れました。これは、私が今回のサマースクールで一番楽しみにしていたプログラムの一つです。AIT からは、今回の研修で主要な移動手段だったバンと呼んでいた大きめの車に乗せてもらい、高速道路を使って二時間ほどのところにありました。見たところ近くに電車の駅やバス停などはなく、日本から個人で訪れるのは難しいと感じたため、今回このように案内してもらえたのは非常に有り難かったです。自分は大学の課外活動で稲作に携わっているため、サマースクール中に講義で習った内容やその最先端の科学技術を活用した農業の発展について目の前で体験できたのは非常に貴重であり、農業についてより知見を広げることができました。

設立時期は 2020 年 8 月とまだ新しく、日系企業ということもあってかお手洗いは日本の某有名メーカーの泡で出てくるハンドソープが置かれていたり、施設紹介の際に案内され座った椅子が日本の旅館においてあるそれであったり、農業機械の使用時の注意書きが日本語であったりとさまざまな箇所ですべて日本を感じられて、ギャップが面白かったです。





見学は、屋外と屋内の施設を徒歩や専用の乗り物で巡りながら、現地の農場で活動されている方がタイ語で説明し、それを AIT の引率の先生に英語で通訳していただくという形で進められました。ただ英語のスピードが速く、正直、英語で字幕があったら何とか理解が追いついたかもしれないとか、自分に英語力があつたらもっと質問できたのになどといったことを何度も感じましたが、そういったときは英語が分かるメンバーに解説してもらったり、実際に機械や装置を扱いながら説明してもらったりしたため、みんなに助けてもらうことで無事、念願のクボタファームを存分に楽しむことができました。



約 35 万 m² の広大な敷地内には米やキャッサバ、シュガーケーンといった主要作物のほか、テーマごとにいくつかのゾーンに分けられており、様々な農作物が栽培されていました。面積は、数字を聞くだけだと分かりづらいですが、中部大学の土地面積が約 38 万 m² なので、中部大学関係者の方は普段過ごしているキャンパスと同じくらいかなとイメージしていただくと分かりやすいかと思います。タイでの主要な農作物の実証実験が、中部大学の広いキャンパスにぎゅっと集まって行われていると想像すると、とてもわくわくしますよね。訪問時、タイはちょうど雨季ということで天気が心配でしたが、当日は見事な晴天で、日本ではなかなか見ることのできないバナナやシュガーケーンの栽培の様子をこの目ではっきりと見ることができ、とても興奮しました。シュガーケーンとはサトウキビのことですが、草丈は少なくとも 2m はあると見られ、密集して栽培されている様子は迫力がありました。また、日本ではあまり馴染みがない植物でも、海外のメンバーにとってはごく普通で日常的なものであるらしく、農場にある作物を指さして次々と名前を挙げ、分かりやすく説明してくれたのは驚きました。日本でいうと、花が咲く前の桜や梅の木を見て、それらがどんな花を咲かせるのか判別できるような感じでしょうか。自分が逆の立場だったら同じように説明してあげられるだろうか、それ以前にそもそも自国の特産品やそれらの収穫までの生育の様子について自分はどれほど把握しているのだろうか、と考えさせられました。

日本の農業は高齢化やそれに伴う担い手不足、食料自給率の低さといった様々な課題がありますが、それは遠く離れたタイでも同様に、昨今における深刻な大気汚染や、農村部から都市への労働力の移動による人手不足といった様々な課題が顕在していると聞きました。日本とタイ、双方の農業の発展と課題解決に向け、国を越えて協力を続けていけることを強く願うとともに、将来自分にできることは何かを考え、実現できるように、今後も中部大学での学びを大切にしていきたいです。

Ayutthaya でのフィールドワーク

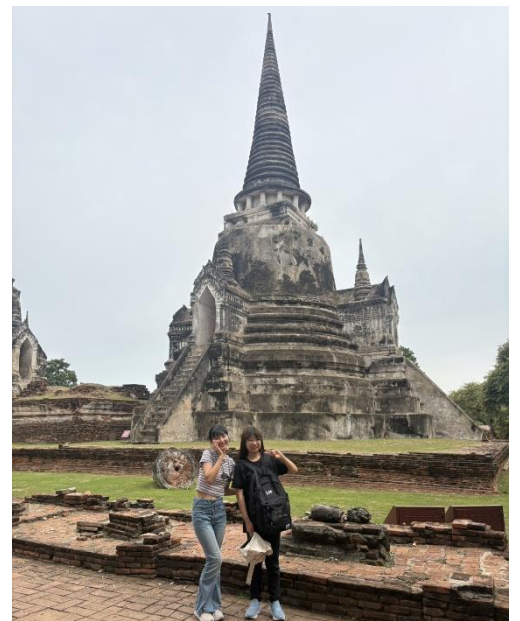
工学部 都市建設工学科 2年 岡田尚士

1 アユタヤ遺跡について

8月30日にアユタヤ遺跡に行きました。アユタヤ遺跡の中でも一番の見所は、「ワットシーサンペット」でした。3人の王が眠る最大の寺院です。アユタヤ王朝の初代ウートン王が最初に王宮を建設しました。しかし、1426年に王宮が火災で焼失移転しました。ラーマティーンボディー2世によって寺院が建設され、1491年に3基の仏塔が建てられました。それぞれの仏塔にはラーマティーンボディー2世と、その父と兄の遺骨が納められています。

その後も増築が繰り返され、最盛期には大小合わせて34の仏塔が並んでいました。また、高さ16mの黄金の仏像などもあり、荘厳な景色でありました。

1767年にビルマ軍の侵略によって崩壊し、今では舞踏や柱の遺跡が残っています。



2 タイの民族衣装について

アユタヤでは民族衣装を身に着けました。タイの民族衣装は、冠婚葬祭や祭日といった特別な行事で着用されます。

男性用の民族衣装は「スア・プララーチャターン」といいます。初めはタイの皇帝が着るために作られましたが、1977年にプミボン国王がデザインを統一して着用を推奨したことで世間に浸透しました。女性の民族衣装は、「シワーライ」といいます。美しい綿やシルクで作られた四角の布を胸に巻くサバイと、筒状のスカートのパ・ヌンで構成されています。



タイの伝統と文化を象徴するシワーライは北部、東北部、南部、中部と、地域によってサバイの巻き方やデザインがそれぞれ異なります。



3 象に乗る体験

一部ではありますが、象に乗る体験も行いました。

象はタイの生活にも信仰にも欠かせない存在です。 タイ語で象は「チャーン」と呼びます。象はタイの人々にとって特別な存在です。なぜ、タイの人々はこれほど象を大切にするのでしょうか。その理由はいくつかあるようです。

かつて他国との戦争になると王は象に乗って戦いに臨みました。象は王を守り先頭を切

って戦うため、勇気と誇りの象徴とされています。 また、多くのタイ国民が信仰している仏教では「ブッタのお母さんはある日、白い象がお腹に入る夢を見てブッタを身ごもったことを知った」という逸話があり、タイ人なら子どもでも知っている有名な話だそうです。

かつては王の乗り物や戦争で活躍しましたが、現代では、林業や農業で活躍する一方、観光業でも重要な役割を担っており、保護活動も行われています。

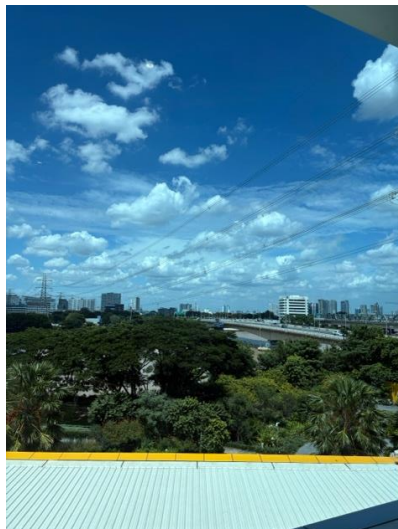
私は、この観光で、タイならではの文化に触れ、壮大な建物を間近で見るなど、感動的で貴重な体験ができたと感じています。



EGAT でのフィールドワーク

人文学部 心理学科 3年 加藤舞

Electricity Generating Authority of Thailand（通称 EGAT）というタイ王国に電力を供給する国営企業の見学をした。施設に入るとオレンジ色が印象的な大きなキャラクターが出迎えてくれて、自分の顔をカメラで読み込むことでオリジナルの ID を作りました。そして、タイの風景が描かれた壁画がある部屋へと進み、タイの近代化の歴史の解説やタイ王国国王であるラーマ五世の功績などの説明を受けました。そして解説が終わるとともに、私たちの背後に描かれていたイラストが徐々に色づいて行きとても印象的でした。また、そのイラストの隣にはチャオプラヤー川とタイの街並みを一望できる窓が設置されており、タイの技術発展の力強さと人々の努力が迫力のある建物から伝わってきました。また、EGAT では、エネルギー問題を主とした環境問題について学びました。EGAT では、親しみを持ちつつ環境問題について学べるように、様々な映像コンテンツやゲーム、問題が用意されており楽しみながら学ぶことができました。特に、壁と床一面が画面になっている部屋で視聴した映像は、環境問題を放置した世界がどのように変化の途を辿るのかを視覚だけではなく、スモークや音、温度変化をもって体験したことがとても印象的でした。映像の最後には、素敵な未来を願って自分たちがエネルギーの一部となるように写真を撮ってシャボン玉のような写真をあげて楽しんだことも良い思い出です。



ICONSIAM



タイ最大級の複合型施設である ICONSIAM に訪れました。夕食としてミシュランガイドにも掲載されている「ทิพย์สมบัติ ผัดไทยประดุจ (ティップマサイ)」というお店でタイ料理のパッタイを食べました。パッタイは米粉の麺をエビやニラ、もやしなどと一緒に甘酸っぱく炒めた料理なのですが、酸味のあるソースや砂糖、もやし、パクチーなどを自由に啜えながらアレンジし食べていくので、元の甘い味から爽やかな味への変化を感じられとても美味しかったです。さらに、EGAT で行われた環境問題に関するクイズ大会で優秀な成績を収めたチームは、こちらもミシュランガイドにも掲載された「ลูกโลกทอง (ルークガイトーン)」というタイティー味のかき氷であるピンスを食べました。予想以上に大きくボリュームでしたがとても美味しかったです。その後の自由時間では、ICONDIAM 内にある王室の女王様がデザインをしているブランドや POP MART など様々なショップを見て各自楽しみました。この ICONSIAM には日本では珍しい、スターバックスリザーブや%ARABICA というカフェでお酒が飲めるお店もあり、とても新鮮でした。また、ICONSIAM の最上階からはチャオプラヤー川とタイの街中にそびえ立つ建物が一望でき圧巻の風景でした。タイで見られる川は、基本的に茶色をしていますが、その川と共にタイ王国の発展が進められてきたと思うととてもない壮大さが感じられました。



修了式

工学部 建築学科 2 年 西村香乃

最終日には修了式がありました。午前中に各々最終プレゼンの準備をして、お昼ご飯はみんなまでピザパーティーをしました。このプログラムで学んだ事、メリット、デメリットなどについて約 10 分間の最終プレゼンを行いました。その後、修了証書を貰って、記念撮影を行いました。

メンバー交流

参加者は、日本から 8 人、タイから 3 人、ベトナムから 2 人、フィリピン、ラオス、ネパールから 1 人ずつの計 16 人で、それぞれ日本人とルームメイトになるように部屋は組まれました。約 2 週間、毎日 3 食一緒に食べ、授業も一緒に受けるので、終わる頃にはとても仲良くなれました。授業が終わった後には、みんなでバスケットをしたり、ゲームをしたりもして楽しみました。



このプログラムを終えた今、何を 1 番思い出すかと聞かれたら、日本では出来ない体験ももちろん記憶に残っていますが、みんなと話した他愛も無い会話が 1 番楽しく、思い出します。たくさんの写真と動画を見ながら、楽しかったなと戻りたいなと恋しくなります。私はこのプログラムに参加して、みんなと出逢えた事が最大の財産になりました。2 週間という期間は短かったけれど、ここでしか出来ない経験と、15 人と出逢えたので、本当に参加して良かったと思いました。



プログラムの良いところ / 難しいところ

応用生物学部 食品栄養科学科 1年 宮口真緒

長所について

私がこのプログラムを通じてよかったと思う点は、様々な文化的背景の違う色んな国の人と交流することができたということである。英語をコミュニケーションのツールとして、雑談をしたり、対話をしたりと様々なテーマについて話すことができた。うまく英語が話せなかったり、聞き取れなかったりしたこともしばしばあったが、それでも身振り手振り一生懸命、自分が伝えたいことを伝えようと努力したことや相手が伝えたい言葉を聞き取ろうと必死で耳を傾けたことは自分自身を成長させる経験になったと私は思う。また、タイの文化を実際に肌で感じることができた。タイの料理を食べたり、お寺を訪問したり、買い物をしたりしたことで、タイの文化や伝統を学ぶことができたと感じる。実際に自分が違う国に行き、生活する体験を得られたことで、改めて日本の過ごしやすさを感じたり、タイの文化や伝統の素晴らしさを学ぶことに繋がったと思う。それによって、物事をグローバルな視野を持って考えることができるようになったと感じる。



短所について

私がこのプログラムに対して改善した方がいいと思った点は、このプログラムの中心核ともなる大学での講義についてである。GIS についての学ぶため、アジア工科大学に赴き、GIS についての講義を聞き、勉強することがこのプログラムの醍醐味だった。しかし、GIS についての専門知識もないにも関わらず、講義内容は非常に専門的かつ英語で行われるため、理解することが非常に難しかった。このプログラムに参加した中部大学生は文系理系問わず、多種多様な学部出身であった。そのため、GIS に関する知識が少ない人もたくさんいた。私は GIS に対する知識が少なくても、理解できるように講義を工夫すべきだと思う。今後、その改善に努めることを期待する。